

僕たちがどうとう自力救済に乗り出したのは六月半ばのことだった。

僕の名は三田村誠。中学一年生だ。成績も身長も中ぐらいだけれど、成績の方は後ろから、身長の方は前から数えた方が早い。たまに、せめてこれが逆だったらいいなと思うこともあるけれど、悩むほどのことはない。

父さん、母さん、妹の智子、そして僕の一家四人は、東京都心から電車で三十分ほどのところにある「ラ・コーポ大町台」に住んでいる。ここには三世帯が入居できるタウンハウスが六棟建ち並んでいて、僕たちが住んでいるのはその三号棟の中央だ。

一家でここへ引っ越してきたのは、半年ほどまえのことだ。父さんと母さんが共働きしていたコンピュータのソフトウェア開発会社から独立して、新会社をつくることになった。必然的に社宅から出なければならぬ。両親は、あの重たい住宅情報誌を毎週

買ってきては、フェルトペン片手に首つびきでよさそうな物件を探し続けた。

僕たちはどうも、あまり運のいい一家ではないようだ。都内の新築マンションには片っ端から応募したけれど、抽選で全部はずれ。仕方なしに中古物件に狙いをかえてからも、「これ!」と思った目ぼしいものをいくつもタツチの差で逃してきた。そのうちに、僕はいささか両親の能力に疑問を感じてしまった。こんなに足回りが悪くて、競争の激しいソフトウェア業界でやっていけるのかしら。

それはともかく、最終的に落ちついた場所がここ「ラ・コーポ」だったというわけだ。もちろん中古で、以前にここに住んでいた一家は新築で入居して半年でここを手放したのだった。転勤なんですよ、という話で、別に殺人事件などのいわくつき物件というわけではない。両親はすぐに手付金を払って——それまでの貴重な苦い体験で、不動産を手にするには一にも二にもスピードが肝心とこたえていたんだろう——翌日には本契約を結んでしまった。ラ・コーポ三号棟の中央部屋は僕たちの新しい家になった。

住宅情報誌を見て、これほどたくさんのお物件が出ているのに、なおかつどの物件にも買い手がつくことに、僕は素朴にびっくりした。熱心に見ていると三ページくらいで目が疲れてしまうあの細かい一覧表の行間から、「うちが欲しいうちが欲しいうちが欲しい……」という無数のつぶやきが聞こえてくるような気もする。なまじの怪談よりよっぽど怖い。

競争に勝って、何とかラ・コーポへの入居が決まったとき、僕たち一家はちよつと野蠻なくらいに喜んだ。なんと言つても都心まで通勤時間が三十分というのは素晴らしいメリットだし、僕たちの住む三号棟は、ラ・コーポに隣りあわせている小さな自然公園と柵一つへだてているだけで、窓からながめると、山のロッジのようにすっぽりと緑に囲まれた感じがする。とうとう僕らにもツキがまわってきたんだと、そのときは思つたくらいだ。

ところが――

僕たちの一家の右隣には、橋本美沙子という三十歳ぐらいの女の人が住んでいる。引越しの挨拶に行つたとき、

「ここは全部分譲だろう？ 独身の女性が自力で買うなんて、いくらローンにしても大したもんだな」と言う父さんに、

「自力じゃないわよ。そんなことありつこないでしょう」ちよつと馬鹿にしたように母さんは言つたものだ。

そのとおり。橋本美沙子さんは、まあ、ほかの男性からタウンハウスを買ってもらつて住んでいる身の上なわけで、その程度のことには、母さんほど鋭くない僕でも、体格のいい中年の男の人が、時々隣を訪ねてくるのを見かけるうちにわかるようになった。

もつとも、両親がそれを知つて心配したほどには、僕も妹もそれで悪影響を受ける

ということはない。テレビでも雑誌でももつとすごいことをやっている。隣の家に「特殊関係人」が一人や二人住んでいたつて――そりゃ多少は興味をそえられるけど――それで「健全な発育が損なわれる」なんてことはない。

ただ、僕としては、僕たち兄妹を育て、会社を運営し、家のローンを払うためにいつも過負荷の状態になっている両親と、平日の夜や時には土曜の午後などに、大型のベンツをスルリと乗りつけて、愛人と楽しむためにゆうゆうとドアの向こうに消えていくお腹の出かかったおっさんを見比べて、いろいろと考えさせられたのは確かだ。

つまり、世の中には不公平なことなどいくらもあるつてことを。先生も親も「努力しなさい、努力すればむくわれる」なんて言うけれど、言っているその声に今いち力が入つてないのは、大人たちの暮らしの周りにも、似たようなことがたくさんあるからなんだろう。それと知らずに「努力しよう、努力すればむくわれないことはないんだ」と真に受けて育つてしまうと、大人になつてから、自分を振つてもつといい給料をもらつている男と結婚しちゃつた元恋人を殺してポストンバッグに詰めて捨てちゃう、なんてことになつてしまうわけだ。

だからと言つて、僕が両親を尊敬していかないわけではない。両親だけでなく、こんな割りの合わないことの多い世界で一生懸命働いている大人はみんな偉いと思つている。面と向かつてそんなことを言つたら大目玉をくうに決まっているから黙つておられるけれど。

ともあれ、ラ・コーポで僕たちを悩ませたのは、橋本美沙子さん自身ではなかった。橋本さんは犬を一匹飼っている。まっ白なスピッツで、名前はミリー。もつと別の状況で——たとえば町なかを散歩させられているとか、スーパ―の中で飼い主の腕に抱かれているとか——見るならばたぶん、わあ可愛い、で済んでしまうタイプの犬なのだけれど、隣人としてはどうしようもないやつだった。引越したばかりのころ、一晩だけ泊まりにきたお祖母ちゃんおばあちゃんは、実に率直に「隣のババタレ犬」と表現していた。ものすごくうるさいのだ。

ミリーが吠ほえ始めると、僕はいつも古い戦争映画に出てくる機関銃を思い出す。かつて、現代戦映画に登場するプレスライフルやスマートガンのような音ではない。もつと原始的でカンにさわるのだ。しかも、断続的にはあるけれど、しよっちゅう吠えている。どこにあんなパワーが秘められているのだろうと思うほどだ。

飼っている本人だつてうるさいだろうに。それがまず、僕たち一家が呆あきれかえりながら抱いた感想だった。僕は、橋本さんはひよつとして耳が不自由で、用心のために番犬を置いているのかもしれないと思った。そんな好意的な解釈も、ある晩、僕が友達から借りてきたコンパクト・ディスクを夜遅くまで聴いていたら、彼女に「うるさい！」と壁越しに怒鳴られたという散々な出来事でパツと消えた。

テキは本気で飼っているのだ。それが迷惑犬だなんて考えてもいないのだ。

この続きは、書籍でお楽しみください。

◎注意

本作品の全部または一部を無断で複製、転載、改竄、公衆送信すること、および有償無償に拘らず、本データを第三者に譲渡することを禁じます。

個人利用の目的以外での複製等の違法行為、もしくは第三者へ譲渡をしますと著作権法、その他関連法によって処罰されます。